

あとがき

当画廊のオマージュ瀧口修造展も今年で第8回目を迎えるが、今回は赤瀬川原平さんによる「トマソン黙示録」展である。ティピカルなトマソンの作品をオフセット版画で作成し、14点入りのポートフォリオ「トマソン黙示録」(ed. 50)でまとめた作品のほか、それよりも大きなサイズのオフセット版画4点(ed. 8)計18点の作品を展示し、ご覧に入れるものである。

この展覧会カタログのテキストは種村季弘さんと作者の赤瀬川原平さんのお二人にお願いし、「目撃者の無限増殖について」および「トマソンからの逸脱」と題するエッセーをご寄稿いただいた。ともにユニークなエッセーで、このエッセーをお読みいただいた方はぜひ、この展覧会(作品)をご覧いただきたいし、この展覧会(作品)をご覧になった方はぜひこのエッセーをお読みいただきたい、と私は思うのである。お二人に厚く御礼申し上げる。なお、この展覧会のためにポスターを作成したことを申し添える。

当画廊がオマージュ瀧口修造展に赤瀬川原平さんをお願いしたのは、いわゆる「千円札事件」(通貨及び証券模造取締法

違反に関する事件)で、赤瀬川さんが起訴された時、瀧口先生が、その弁護に立たれた、という事実が據どころである。今から21~2年前のことである。瀧口先生は赤瀬川さんと2人の印刷業者の方のために、その罪が不当で、当然無罪であるとの弁護の論陣を張られたのである。その最初の意見陳述(昭和41年8月10日)および最後の弁論要旨(昭和42年5月16日)をこのカタログに収録した。これらの文章は今読んでもみずみずしく迫力がある。裁判官すなわち一般の人々に分りやすく丁寧に現代美術のなりたち、オブジェについて、さらには表現の自由等々について説いておられる。これはわが国の現代美術にとって貴重な歴史的証言と言わざる得ない。それに20年前と現在を比べるとわが国の現代美術の状況はさほど変わっていないと私は思うので、なおさらこの弁護の論文は意味があると考える。敢えてこのカタログに収録する所以である。文中、先生がこの裁判の意義について触れられた次の二節を私としては挙げずにはおられない。

「芸術はつねに平穏無事な温室の中で生まれ育つものではなく、現実の日常のなかで風や雨にさらされながら生きているものである。」と。

さて、赤瀬川原平さんのトマソンであるが、最初、このトマ

ソンなる言葉を聞いた時、これは一体どういうことなのか？ とまどった。もう3～4年前のことである。私の若い友人岡戸敏幸君が、赤瀬川原平さんのファンで、トマソン、トマソンと言う。私がトマソンて何？ 一体どういうこと？ と聞くと、岡戸君はトマソンとはかつての巨人の大物四番打者で鳴りもの入りで入団したが、実際はサッパリ打てずしばらくして退団したプロ野球の選手の名前で、役立たずの「もの」の意であると、説明してくれた。なるほどそういうことか、と納得したのが私とトマソンとの付合の始まりである。それにしてもトマソンとは言葉のヒビキがいい。トマソン、トマソン……飽きないのである。うまいネーミングだなと感心している。

その後、「超芸術トマソン」（1985年5月、白夜書房、1987年12月ちくま文庫）、「東京路上探険記」（1986年7月、新潮社）を読んだ。（ついでながら、ご存知と思うが、赤瀬川原平さんはまたの名を尾辻克彦といい、芥川賞を受賞された作家である。その文体は軽妙で独特の味がある。うまいのである。）そこで、私もいつの間にかトマソン的物件をさがしているトマソニアンになってしまっている自分を発見したのである。どちらかと言うと私は道を歩く時、ポンヤリと考えるでもなく考えないでもなく、風景などあまりみていないのであるが、トマソンを意識するようになってから目付きが変った（!？）。

先日、大阪に出掛けた際、京都に泊った。私は縁の多い静かな京都が好きで、関西に旅行するとたいてい京都に宿をとる。朝がた、南禅寺近辺を散歩したが、金地院の近くで、大きな門の前の道路の脇に不定形の石が十数個、一列に埋められているのを見つけた。これぞトマソン！ と内心狂喜したものである。もっともこの程度のものはすでに発見、登録済であろう、そんなに慌てることはあるまいとしばらくして冷静さをとり戻したのであるが。こんな具合に道を歩くにも近頃はひとつの視点が自ら出来て、世界が広くなったのを感じるのである。トマソンの効用というべきか、はたまた赤瀬川原平の術中にはまったと言うべきか。

この赤瀬川原平「トマソン黙示録」の版画作品は当画廊が版元で発売する最初の作品で、記念すべきものとなったことを記しておきたい。そして、この版画の制作ならびに展覧会カタログ、ポスター、案内状等の作成にご尽力いただいた東幸見さんにお礼を申し上げる。最後に赤瀬川原平さんのますますのご健勝を祈るものである。

1988年6月15日

佐谷画廊
佐谷和彦